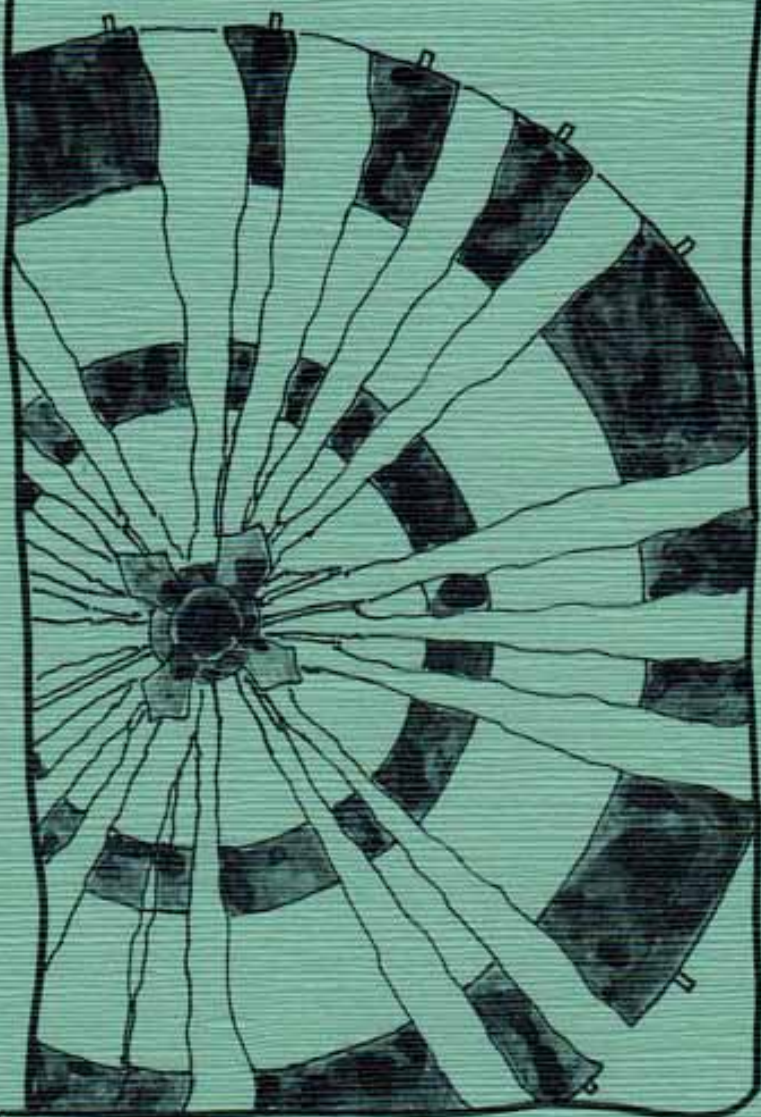


やぶれ傘



二二四号
二〇二二年二月

換気するたびに目を遣る冬の雲 根橋宏次

龍の玉もとのとおりに隠しけり きくちきみえ

竹林の闇が深まる空つ風 大島英昭

春近しふたり待ちある理容室 丑久保 勲

鳩の群に雀来てゐる春隣 廣瀬雅男

引き潮の時は地続き枯葎 瀬島洒望

かくれんぼたれか冬木の陰にゐる 青谷小枝

春隣光る首輪で跳ねる犬 小山よる

コーヒー苦しストープの楯弾け 藤井美晴

風花のホームへ西下する列車 渡邊孝彦

裏木戸に薄日差しくる花八手 秋山信行

小春日の夕日を後に土手下る 白石正躬

白壁に一月のかけ薄くあり 有賀昌子

遠く船蜜柑畑に陽の射して 安藤久美子

ぼる市の柳行李の古着かな 天野美登里

抄 集 句 傘 紀 大 崎 や ぶ れ

枯れ葎ブルドーザーが迫りくる 石塚清文

スマホ持たずやや世に離る十二月 岩藤礼子

音もなく追ひ越す影や冬の朝 神山市実

豆大福包む薄紙雪もよひ 倉澤節子

退院の話を開けり年の暮 黒澤次郎

初詣子の横顔の大人びて 小泉里香

ひとりごと言ひつつひとり年用意 小巻若菜

いつも行く蕎麦屋の窓辺冬董 手島百合子

玉砂利に深く杖つく初詣 中島和子

神棚へお供を子は脚立にて 貫井照子

寒波くる手術になると友は云ふ 萩原久代

月白の田圃に犬の声のして 本郷美代子

真正面に富士のある道枯尾花 村田 武

冷たいねと言ひて放さぬ手の強さ 武藤節子

やはらかき朝日の届くお元日 山本久枝

銀杏降る墓地で法会の経を聞く
石塚清文
木枯しの野火止越えて平林寺
明け方の冷めた湯たんぽ足元に
蔦枯れて蔵の壁には窓ふたつ
底冷えの部屋に灯点もす独り住み
ポイントのガシヤツと替る寒の朝
枯れ葎ブルドーザーが迫りくる

石原健二

茶の花の横を子らゆく通学路
掌に風花のきて消えゆけり
雨上がりがり峰から谷へ冬の虹
うとうととすることしばし日向ぼこ
ふうふうと息吹きかけて根深汁
霜柱下駄に踏みつぶされてゐる
初雪に足をとられて坂のぼり

泉 一九

石州の瓦の郷の村紅葉
枯れすすき阿蘇の山から下る道
黒豆を引いて干す畑京丹波
あちこちの柚子届きくる冬至の日
かく細く欠けたる月や大晦日
「賀正」つけ都電顔だす坂の上
寒風の波音さやか九十九里

伊藤 薫

擦れ違ふ人の眩しき冬日和
セーターを毛糸ほつれたままで着る
歳の市夜は寿司屋を予約して
節料理出来たところに孫が来る
除夜の鐘窓を細目に開けて聴く
ご近所と出会ふ鎮守の初詣
朝酒の切り上げどきと雑煮出し

スマホ持たずや世に離る十二月
実南天チョコキを出したい子とジャンケン
選びをり鍋もコートも軽きもの
納豆を百回かいて日短か
数へ日やいつものやうに鳥の影
恙なく明日の雑煮の餅を切る
書き添へて術後五年とある賀状

岩藤礼子

冬浅き商店街を通り抜け
椅子固きストーブ列車スルメ焼く
写経する講堂広く息白し
二時間後裏返しする蒲団干し
メモ欄の病院予約初暦
昼風呂に入りまた飲む二日かな
風花を追ひかけ燥ぐ子らと犬

江口恵子

拾ひたる桜紅葉を朶とす
糸を操る夜なべの記憶もがり笛
あやとりのまだまだ続く日の短か
水仙の三つ四つ開く日和かな
なんとと言ふ空の青さか枯櫛
窓ごしの冬のシリウス瞬か
蹲踞にいくつか浮いて黄櫨落葉

奥田温子

U字溝の蓋ガタガタと石露の花
敷き藁を蹴散らす犬に冬日差す
音もなく追ひ越す影や冬の朝
枯枝に足をとられてしまひけり
ザクと踏むシートの下霜柱
年の夜の蛇口を細く細く開け
同窓会の知らせメールで年始

神山市実

毛糸玉座敷の隅へころがりて
編みかけのセーターを又ほどきをり
真夜中に甘き葛湯を飲んでゐる
霜の声窓より入りきたりける
しぐるる夜祖父の歌留多を取りだして
年用意終へて今夜の湯に浸り
初雀降りてきてをり午後の庭

木村珊搜

倉澤節子

古紙括る紙紐十二月八日
豆大福包む薄紙雪もよひ
蝦蛄葉仙人掌垂れて齒の治療中
年の暮発車間にチェロ乗り来
餅間のピッツアとホットミルクテイ
四丁目銀座に雪の降りしきる
白菜の採り残されて鴉二羽

黒澤次郎

散策のついでに寄れば神の留守
禅寺や石露が寄り添ふ三波石
退院の話聞きかけり年の暮
ポケットに軽き釣り銭年の暮
ともかくも松一對のお正月
冬枯れやどこかに猫の声あり
小寒や舌に絡まる五平餅

小池一司

鮫鱈の皿はみ出して売られぬ
冬うらら植木の手入れをちこちに
冬茜宵の明星輝きて
残されし草石蚕の色の鮮やかな
冬ぬくし車の上の猫二匹
窓際で猫眠りぬる去年今年
どんど焼札と飾りの舞ひ上がり

櫛紅葉くぐりし先に闇魔堂
雑踏をはなれ小路のおでん酒
冬の月橋のたもとに駐在所
縄跳びの音止み空に星ひとつ
初詣子の横顔の大人びて
朝刊を開きしままのけふ三日
読み終へし本読み返す小正月

小泉里香

小巻若菜

日曜日のポスト空っぽ冬きたる
花八つ手ちかちかとゆく宇宙船
劇場へ少し厚めのジャケットで
針に糸すつと通つて冬うらら
沈みゆく冬陽に雲は縁取られ
泥つきの葱が届いて小晦日
ひとりごとと言ひつつひとり年用意

坂本和穂

孫の影長く伸びけり七五三
庭隅の野菜刈り取る十二月
文豪の泊まりし部屋に箱火鉢
初空に陽が登るまで海眺め
からす鳴き樋に隠れる初雀
敷石の上で蟻螂凍てついて
朝日射す雪の箱根の露天風呂

佐藤稲子

冬日差す畑いち面京野菜
雨後の宇治に二重の冬の虹
身にしまむや寺に最古の東司蕨
風呂吹は八丁味噌のありてこそ
門松やテニスはじめは夫と組む
雪見酒雪降り続き降りしきり
窓際の雪を雪の落つる音

眞田忠雄

初霜に打たれし今朝の蕎麦を刈る
バーナーを停めて風見る野焼かな
風垣を男結びで締めてをり
年惜しむ子等の悦ぶシヨータム
去年今年八十路を過ぎて登る坂
汲みたての井戸若水で蕎麦を打つ
泣き初めの嬰兒を宥めすかす兄

柴崎和男

枇杷の花硝子屋はひと出払つて
冬ぬくし糸通し器もまた形見
男坂下れば暮れの広小路
数へ日のドヤに落ちてるスポーツ紙
隣家から外孫の声大旦
振り返りまた一礼す初詣
シヤッターを上げれば窓の初明り

高橋均

木の瘤と見まかふ朝の寒雀
金粉の浮きしさかづき十二月
かん高き鳴き声ひとつ初雀
二年ぶりに家族揃ひてお屠蘇かな
背に挿した破魔矢の鈴がりんと鳴り
みそつばの孫もまざりて雑煮膳
樽酒の酔ひの残りし初詣

高橋宜治

逆上がり股の向こうに冬の空
冬夕焼切り絵のごとく富士の山
手をさすりふと見上げれば冬の月
窓のすぐ外残りぬる雪だるま
家族みな集まりて食ふ晦日そば
寒玉子泣く子をあやす姉のゐて
日向ぼこまぶたの裏は万華鏡

◇3月・4月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
3月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	2日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	秋山 信行
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	26日(土)	AM10:00	楽 天 会	あいパル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
4月	1日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	1日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山 信行
	4日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン1	丑久保 勲
	5日(火)	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	5日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	16日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	17日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	丑久保 勲
	23日(土)	AM10:00	楽 天 会	あいパル	廣瀬雅男
	23日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

4月17日(日)の吟行。

集 合 10時、J R京浜東北線・北浦和駅。

吟行地 さいたま市・見沼。(浦和西高校の東側一帯)。

句会場 武蔵浦和コミセン第3集会室

冬萌えの草地にボール蹴られけり
 あいさつをさされて解きし懐手
 乱暴に電話を切りたる初電話
 門松のすぐそばりにある犬の糞
 名水の言はれ流るる注連飾り
 侘助の行はる蕎麦屋の窓辺の墓
 侘助の行はる蕎麦屋の窓辺の墓

手島百合子

みどり児の下を掌に受けある小春
 バス停の人マフラーに覚えあり
 数へ日のセンサーライト点く空き家
 車窓より寒暁の街旅に出る
 子と孫と初風の瀬戸眺めをり
 虎落笛仕舞ひ湯にただ浸りぬる
 坂下る先はまつすぐ冬田道

竹内文夫

◎連絡先 秋山 信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856